九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄表紙に於ける漢字 ： 黄表紙十一種の使用漢字一覧

矢野, 準
静岡女子大学講師

https://doi.org/10.15017/10508

出版情報：文獻探究. 10, pp.59-62, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

黄表紙に於ける漢字

―黄表紙十一種の使用漢字一覧―

矢野準

1

「近世に於ける表記法」に関する研究も進み、各種文献類の表記実態等が明らかにされつつある。[1] しかし、解明されるに至らない部分も多く、残されていると思われる。筆者は、「戯作」の一類である「黄表紙」類を素材とし《「文の読みやすさ」への配慮》という面を考えてみたいと思っている。今回はその最初の試みである。

「黄表紙」の特色の一として、各丁の紙面のほとんどを絵が占め、絵の余白部分に細かい字で説明文と登場人物等の詞書とが記されることをあげることができる。その文章が漢字交りの平仮名文であることや句読点などはほとんど認められないことなどもよくしられている。かかる条件下にあって、「読みやすさ」のための配慮がどの様な具合になされているかを考えることは、「近世後期の文字生活」の一端を明らかにすることになろう。「読みやすさ」への配慮としては、次のようなものがあげられようか。

(一) 表語機能の面＝1漢字の交用　2平仮名字体（異体字）の相補使用　3連綿体や変字法の使用　など

(二) 形態の面＝1漢字字形の平明化　2平仮名字体の合理化[3]　など

右のものなど各方面からの調査検討が必要であるが、今回はそのための予備調査の報告をしてみたい。

2

ここでは、「日本古典文学大系59」所収の「黄表紙」十一種に使用されている全ての漢字を抜き出し、それを一覧表示した。これは、前項(一)1に関して、「漢字を用いるのに何らかの法則性が有るか否か」を考えるための実態調査である。紙幅の都合でとりあえず一覧表のみを示し、分析等は機会をあらためて行うことにしたい。

（注）

(1) ここ二、三年に限っても目についたところで左の論考があげられる。

山田俊雄氏「雑俳書の表記を資料として考へられることの一例」（『国語学123』一九八〇・一二）・坂梨隆三氏「曽根崎心中の「い・ひ・ね」について」（『近代語研究6』一九八〇・五）・同「浄瑠璃本の半濁音符」（『東京大学教養学部紀要人文科学科紀要74』一九八二・三）・土屋信一氏「「浮世風呂」の片仮名表記語」（『近代語研究6』一九八〇・五）　など

(2) カタカナや振りがなもいくらか認められるようである。

(3) 浜田啓介氏「板行の仮名字体」（『国語学118』一九七九・九）にこの面での黄表紙類への言及がある。

使用漢字一覧

(1)
金々先生栄花夢（二冊　恋川春町　安永四 1775）

一7・二・三6・四9・五・七・八6・十2・万2・壱・人9・大6・女3・申4・郎10・御4・中2・日6・代8・事・所5・下2・上・子3・小3・山5・手10・月・心2・入・川2・世6・金16・門・丁・也2・内・引3・生・目5・出15・名6・男・給・今4・田・合・見3・身・花3・戸4・文・天・立2・竹・兵6・言・夜2・者・北・年2・源8・清4・候3・里3・主3・江3・雪3・夢3・玉2・老2・寺2・君2・来2・若2・則2・雷2・餅2・神2・力・口・久・丈・友・市・白・赤・黄・羽・其・屠・室・品・屋・持・梅・染・酒・泉・家・草・望・僧・衛・龍

(2)
高漫斉行脚日記（三冊　恋川春町　安永五 1776）

一16・二2・三9・四・五・六・九・十2・百・千2・壱2・人22・大13・女・申3・郎2・御5・中3・日12・代6・此・所・下・上・子6・小5・山10・手9・月4・心5・入5・又・川4・金8・門12・道4・也4・引4・生・目4・付・出6・名2・工5・分2・太2・田6・左3・右3・合3・見16・身12・花10・戸2・木・水・天・立4・古7・外14・行・兵・言・夜2・者・高・西・南・北2・国・町2・弟8・介7・自7・白6・松6・句5・風5・要5・玉4・茶4・之3・定3・會3・法3・口2・寸2・休2・坂2・助2・明2・屋2・扇2・暑2・土・士・刀・毛・友・広・正・公・号・曰・守・米・谷・向・気・佐・利・折・志・雨・京・命・岩・幸・面・待・家・都・雲・義・器・魔

(3)
見徳一炊夢（三冊　朋誠堂喜三二　天明一 1781）

一19・二4・三9・四10・五16・六8・七6・八2・十25・百16・千4・万13・壱・貳3・廿7・人16・大12・女9・申4・郎31・御14・中4・日15・代10・此12・事17・所14・下2・上5・子4・小2・山2・手3・月3・心5・両15・入・又4・川4・金10・門12・道・丁・也・内2・引・出16・名6・男・給・工12・今3・分3・太26・本3・田・左9・右3・合3・何4・花2・戸6・文3・木・言3・夜・時5・高4・間3・東・西・南2・北・年21・国5・町3・清33・江7・京5・武5・次5・同4・芦4・井3・半3・印3・狂3・匁2・片2・句2・寺2・来2・長2・茶2・原2・品2・画2・部2・深2・芝2・銀2・新2・書2・野2・乂・久・丸・才・斗・仏・夫・永・吉・地・字・成・早・扨・谷・折・条・迄・法・忌・坂・初・判・栄・淺・草・津・枕・其・崎・宿・帳・第・通・都・黒・喜・等・番・評・座・開・集・夢・桜・編・筆・諸・賀・頭・銭・惣・麓

(4)
御存商売物（三冊　山東京伝　天明二 1782）

一3・二2・三4・四5・五・六2・八5・十3・百・壱・人8・大2・女・申3・郎2・御5・中6・日2・代・此2・事7・所・子3・小5・山2・西・又2・川2・世・門・道3・丁・生・目・男・工2・切・太3・本7・田・右・何・見・戸・文2・古・外・言6・夜2・間4・東・国・方5・仲4・青4・丈2・公2・色

同2・地2・原2・笑2・喜2・士・毛・氏・夫・元・石・叶・可・先印・有・江・赤・折・条・京・風・雨・物・柱・柳・是・恋・津・袋・意・深・絵・義・臺・崎・藤

(5) 大悲千禄本（袋入一冊　芝金交　天明五1785）

一5・二・三2・五・八・九・千9・壱・人6・大4・女3・申2・郎2・御18・中・此・事・下3・子・手20・両4・金3・也・付・出・給4・分・本4・田2・兵2・形・画・箱

(6) 莫切自根金生木（三冊　唐来参和　天明五1785）

一10・二4・三7・四5・五6・六3・七3・八3・十7・百8・万2・廿・人7・大13・女4・申9・郎2・御24・中5・日8・代2・此2・事3・所・下2・上2・山・月・心・両3・入・又・川5・世・金8・道・内4・生5・目・付7・分・切・本・何2・水・外・高・口2・弁2・江2・里2・利2・松2・枚2・會2・元・化・札・伝・共・有・初・坂・京・宝・思・是・珍・原・朝・義

(7) 江戸生艶気樺焼（三冊　山東京伝　天明五1785）

一6・二36・三8・四7・五8・六3・七6・八5・九・十8・百6・千・万・廿・人7・大15・女17・申7・郎40・御3・中12・日16・代2・此11・事10・所3・下3・上2・小5・手・月5・心・両11・入2・又・川6・世・金5・門2・道5・丁7・也3・内・生3・目・付2・名3・男3・今2・分・切・太・田・合・何3・身7・花・木・水2・立・古・行7・兵3・時2・高2・間・町2・介4・口2・丈2・弥2・持2・候2・候2・夕・土・井・仇・用・白・正・伊・共・寺・早・次・気・豆・足・利・形・長・京・命・奉・浮・納・袖・猪・第・衆・過・新・藤

(8) 文武二道万石通（袋入一冊　朋誠堂喜三二　天明八1788）

一11・二8・三19・四3・五6・六2・七6・八2・九2・十4・百5・千3・万3・壱・人18・大22・女4・申5・郎27・御11・中3・日3・代・此・事15・所7・下6・上5・子・小17・山8・手2・月心3・両6・入3・又・川4・世・金2・門3・道4・也2・内3・引3・生・目・付3・出6・名7・男2・給2・工3・今3・分2・切・太5・本3・左3・合2・何5・見・身5・花・文13・水3・火・天2・古・外・竹2・行4・時2・間・東・南・武11・是5・弥5・夫3・平3・次3・来3・思3・公2・穴2・同2・助2・長2・馬2・鳥2・義2・原2・口・土・斗・方・片・犬・王・少・多・弓・矢・石・打・処・句・用・司・足・米・羽・伊・乱・佐・坂・条・定・忠・俗・屋・廻・皆・茶・重・香・恋・帳・略・富・諸・藤

(9) 孔子縞子時藍染（三冊　山東京伝　寛政元1789）

一3・二6・三13・四3・五9・六2・七3・八6・十8・百11・千3・拾・人10・大17・女3・申6・郎6・御14・中5・日4・代5・此3・事11・所4・下3・上2・子6・小3・山5・手6・月・心・両14・入・川・世2・金12・門2・道3・丁4・内・引・

生・付2・出・名3・男3・給3・卫2・切2・左4・合3・見2・花・文5・天3・竹・行・言・者・時・高・年2・国2・町・用5・介4・通4・家3・神3・物3・地3・仁2・主2・長2・候2・孫2・徳2・銀2・折2・工・升・正・札・米・交・仲・伝・列・吉・団・当・曲・礼・谷・作・君・孝・吹・狂・学・居・性・明・味・屋・紙・飛・黒・野・富・無・新・様・語・論

(10) 心学早染艸（三冊　山東京伝　寛政二1790）

一5・二・三7・四3・五4・六2・七・八2・九・十4・百4・千・万3・壱・人13・大7・女12・申3・郎39・御2・中4・日9・代2・此7・事22・所6・下・上4・子6・小・山2・手9・月2・心7・両3・入5・又10・世・金2・道3・丁2・内4・引9・生3・目・付・出10・男5・給8・今11・切2・太29・本・左・右・合3・何・見4・身2・戸2・文2・木・水2・火・天5・立・古・外4・竹2・行6・兵4・時2・年3・国・理34・思5・神4・土3・来3・魂3・仁2・先2・是2・帝2・帳2・徳2・久2・乙・力・才・也・夕・丸・井・曰・犬・玉・死・気・江・伊・画・忠・取・松・秉・風・度・屋・政・祝・前・茶・哥・家・記・帳・奥・詩・精・魄・燭

(11) 敵討義女英（三冊　南杣笑楚満人　寛政七1795）

一4・二4・三6・四3・五5・六2・七2・八・十6・人27・大3・女・申7・郎40・御3・日5・代・此14・事20・所・下3・上・子4・小2・山・手・月4・心7・両・又・世・門20・引・名・給14・卫20・今・太24・左20・何4・見2・身2・木9・竹7・夜・者2・次27・浅24・岩22・新20・介19・之18・茂18・平16・逸16・舟8・桂8・斎7・筍7・才5・候5・尺3・共2・工・久・夫・寺・存・里・弟・奉・命・思・婦・櫻

一覧表の説明

※作品毎に使用された漢字と用例数とを示した。

※用例数は漢字の直下に算数字で示したが、一回使用の漢字については用例数を省いた。「内4・外・」とあるのは、「内」という漢字が四度、「外」という漢字が一度、各使用されていることを意味する。

※「畜」・「ら」・「ヒ」などは、ある意味で漢字に準ずるものとも考えられるがここでは調査の対象から除いた。

※ルビの付された漢字は、調査対象としたが、いくぶん性格を異にすると思われるのでこの表からは除いた。

――静岡女子大学講師――